世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

日本の宗教人口：2億と2-3割の怪の解

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-12-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡辺, 浩希 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1657

日本の宗教人口

—2億と2-3割の怪の解—

武蔵野大学仏教文化研究所研究員
渡　辺　浩　希

はじめに

日本人の宗教意識を論じる際などに、日本の宗教人口はどれくらいかというときに、比較的よく採りあげられ言及されるふたつ（2種類）の数値がある。ひとつは、文化庁が毎年発行している『宗教年鑑』に掲載されているもので、最新のものでは信者数の合計が2億659万5,610人となっている[1)]。日本の総人口が1億2-3,000万であるから[2)]、2倍とはいわずも、はるかにそれを超えているのである。もうひとつは、統計数理研究所が1953年以来5年ごとに実施している「日本人の国民性調査」の、これも最新の第12次（2008）の数値では、「宗教について」「何か信仰とか信心とかを」「もっている、信じている」という人が27%となっており[3)]、あるいはまた、『読売新聞』が数年に1度行っている宗教観に関する調査の、これも最新の2008年の数値では、「何か宗教を」「信じている」人が26.1%というように[4)]、日本人で何らかの宗教を信じている、何かを信仰している人がおよそ2-3割という数値である。

かたや日本人の2-3割しか信仰をもっていない（宗教を信じいていない）、すなわち裏を返せば7-8割の日本人は無信仰、無宗教であるにもかかわらず、かたや人口の2倍にせまる宗教人口があるという。本稿の目的は、このふたつの数値の不思議を解明し、それらが意味するところを説明することにある。

1．宗教人口の算出方法

まずはじめに、それらの数値がどのようにして算出されたものかという方法論の問題を確認しておこう。なぜなら、日本の宗教人口の統計に関して考察しようとする場合、この方法論の違いがきわめて重大な意味をもつからである。

一般に、ある社会集団（例えば国や地域）における信者の数を算出するにあたり、その調査方法は大別すれば2通りある。ひとつは教団に聞く、「あなたのところの信者さんは何人ですか」と問うて、返ってきた答えを足していくというやりかたである。もうひとつは個人に聞く、国勢調査の際などに、あるいは何らかの方法によって抽出して、一人ひとりに「あなたは何か宗教を信じてますか（どの宗教を信じていますか）」「信仰をもっていますか（どのような信仰をもっていますか）」と聞いていくというやりかたである。そして、このふたつの方法によって算出された信者数は、日本の場合それが特異的に甚だしいのであるが、往々にして乖離することが知られている[5)]。

そして、先に示した数値のうち、文化庁による2億超というのは教団に聞く方法によるものであり、統計数理研究所あるいは『読売新聞』の2-3割というのは個人に聞く方法によるものなのである。

幾らかもより詳しく確認しておこう。

文化庁によって毎年行われている調査は、いずれも所轄を問わず，包括宗教法人、被包括宗教法人を包括する非宗教法人宗教団体、単立宗教法人とに調査表が送附され、前2者についてはその教派、宗派 教団等全体の、後1者についてはその法人自身の信者数を尋ねるというものである[6)]。調査表を送附する際、文化庁では、一応、信者を、その法人（団体）において「定める信者の義務を果たしている者（例えば信者名簿などに登録されている者）」と定義し、「氏子、崇敬者、檀徒、信徒、信者、会員、同志、同人等の総称」というように例示している。しかしながら、どのような人をもって信者とみなすかは、最終的には教団の判断に委ねざるを得ない。返ってきた回答にある数値が、例えば前年と大幅に異なっている場合な

ど、疑問に思われる際には、あらためて電話等により確認作業を行うが、基本的には回答する側の自己申告である。その自己申告の数値を足しあげていくと2億を超えるということなのである。教団に聞く方法による、全国規模の、ほぼ悉皆といいうる調査は、日本においては、この文化庁の調査が唯一のものである。

個人に聞く方法のほうは、統計数理研究所、『読売新聞』とも、一定の方法によって抽出した個人にたいする個別（訪問）面接聴取法による調査である[7)]。統計数理研究所の調査では、「宗教についておききしたいのですが、たとえば、あなたは、何か信仰とか信心とかを持っていますか?」と尋ね、回答の選択肢として「1. もっている、信じている」と「2. もっていない、信じていない、関心がない」とを用意している。『読売新聞』の調査では、「あなたは、何か宗教を信じていますか」と尋ね、回答の選択肢は「信じている」と「信じていない」とである[8)]。

2．宗教に関するある類型論

いわゆる宗教の類型論には、例えば基本的なものとして一神教／多神教、世界宗教（普遍宗教）／民族宗教、創唱宗教／自然宗教といったものなどがあるが、ここで、本稿で問題としている2億と2-3割の怪を解くにあたって重要な鍵となるある類型論を紹介しよう。それは、文化宗教／制度宗教／組織宗教／個人宗教／会員宗教という類型論である。これは、もともと前4者は井門富士夫が提唱し始め、後に竹村牧男が後1者をつけくわえたものである。ここでは、竹村牧男のまとめたものに基づいて提示する[9)]。

①文化宗教：文化的な枠組みのなかでの一種の宗教行動。例えば初詣にいく。また七五三などの際にはお参りにいく。あるいはお盆になると、帰省をして、仏壇に手を合わせる、お墓参りにいく。その神社やお寺にたいして何か特別な信仰をもっているわけでもない。けれども、そのときどきにそういうことをしないと気がすまない。その神社にどういう神さまが祀られて

いるのか、そのお寺の宗旨は何か、御本尊は何かということは知らない場合が多い。本来の宗教的な意味合いというものが希薄化した、脱落した状態で、ある種の行動のための無意識の枠組みがあって、それにそって宗教的な行動をする、いわば年中行事的に人々が行う行動様式、そこに見られる宗教現象をいう。

②制度宗教：地域あるいは家族といった制度に支えられて成立している宗教。あるいは、宗教の、そういった制度に支えられている側面をいう。神社神道であれば、およそ地域という制度と一体化している氏子区域、氏子制度というものに支えられており、伝統仏教、寺院仏教であれば、檀家制度なる家族という制度に支えられている、神社や寺院のそういう側面をいう。

③組織宗教：いわゆる教祖といった存在を中心に新たに組織された宗教。教祖といわれる人がいて、その教祖の宗教体験が人々に伝えられ、教義もまとまっていき、ひとつの教団ができてくる、いわば比較的新しい宗教、いわゆる新宗教の多くはこれである。また例えば、いわゆる鎌倉新仏教なども、江戸時代の檀家制度を経て制度宗教といってよい様相を呈していくが、その当時にあってはまさに一つの新興宗教、組織宗教であったといいうる。

④個人宗教：宗教書や文学、芸術等を学びながら、個人の内心において宗教的な世界観とか人生観とかを築いていく、そういうところに見られる宗教行為。団体というものに束縛されたくない、何かひとつの団体に属して一緒にやるというのは嫌だ、けれども自分なりの人生観、世界観というものは追求していきたい、教団にはかかわりたくないけれども、何とかして自分のアイデンティティを探したい、自分とは何かという問題を自分なりに解決したい、自分の人生観、世界観を築いていきたい、そういう営みのなかに見られる宗教を個人宗教と呼ぶ。

⑤会員宗教：教団の宗教（制度宗教／組織宗教）と個人宗教の中間形態のありよう。教団に入るわけでもない、しかしながら全く個人というわけでもない、例えばカルチャーセンターなどが催す宗教関連の講座、あるいは寺院などが実際にさまざまな活動をするなかで行っている会員制の文化講座のようなもの、これらに参加することは特定の教団に入るということではなく（文化講座にはでかけていくが檀家としてはかかわらない）、入信して教団に入る、ある団体に所属するというのではなくて、参加したいときに参加する、いつでも参加できる、いつでもやめたいときにやめられる、必ずしも個人というわけではなく、一緒に何か勉強し、模索し、探求するけれども、その団体には縛られないというようなものをいう。

3．なぜ2-3割なのに2億を超えるのか

上記の方法論および類型論を踏まえつつ、この問題を、なぜ個人に聞くと2-3割（あるいは1割前後）[10]なのに教団に聞くと2億を超えるのかという視点から考察してみよう。

まず2億超の内訳を見てみると、神道系1億582万4,798人、仏教系8,954万834人、キリスト教系214万3,710人、諸教908万6,268人となっている[11]。きわめて大雑把にいえば、神道系が1億、仏教系が1億となっていて、これが2億超の主因であるといってよい。この先は、神道系と仏教系とについて考察をすすめる[12]。結論の一部を先にいえば、神道系、仏教系それぞれの1億は、文化宗教および制度宗教によってそのあらかたが、組織宗教および会員宗教によってその一部が説明可能であると考える。

3-1）神道系

神道系1億582万4,798人のうち、実は、神社本庁の信者が9,579万1,474人、神社本庁をはじめとする神社神道系の信者が9,621万333人で

あり[13]、その他のうちの多くは教派神道のそれをはじめとして組織宗教およびその延長線上にあるものの信者として考えることができる。

神社神道系、なかでも神社本庁の信者は、氏子を基本とし、これに崇敬者を加えて算出される。氏子とは、広義には、氏子区域に住む住民すべてを指し、崇敬者とは、氏子区域外の住民でその神社にたいして崇敬の念をもつ人々、もしくは氏子区域をもたない神社に崇敬の念をもつ人々である。一口に氏子といっても、その神社との関係のありようはさまざまであり、それぞれの神社が、氏子の人数を具体的にどのように把握し、どのような氏子を、文化庁に報告する信者とみなしているかは詳らかでない[14]。

例えば教派神道に分類されるある教団の信者として、あるいは神道系の単立の宗教法人の信者として数えられながら、神社神道のある神社の氏子あるいは崇敬者として二重に数えられている人もある可能性があり、さらには神社本庁のなかでも氏子としてかつ崇敬者として複数回数えられている人もあろう[15]。

また、初詣の参詣者数を信者数としてそのまま報告している神社もあるという[16]。ただし、農村部の一部の神社においては、初詣の参拝者数が氏子数におおよそ一致しているとも考えられる。

3-2）仏教系

仏教寺院の圧倒的多くはいわゆる菩提寺であり、その信者数は檀家として世帯数で把握されている。信者数は檀家数から推計されることになる[17]。

現代の日本においては、葬送や埋葬のありようが多様化し、永代供養墓の登場などに見られるように家のお墓を代々継承していくという本来の檀家制度が制度疲労をおこし、お墓にたいする意識も大きく変化しつつあるという指摘もあるが[18]、一方ではお墓参りをし法事を営む人がいまだに多数であることも確かである。江戸時代から続く、地方あるいは農村における伝統的檀家制度はかなりの程度廃れてきているとはいえ、都市に流入した人間（およびその子孫）の大部分がその都市において何らかの宗教（特にいわゆる新宗教あるいは新々宗教）に加入したわけでもない。もし

もそうならば、日本の宗教人口（個人に聞いた場合）は2-3割を大きく超えるはずである。より多くは、無宗教、自分は何か特定の宗教を信奉していないと考える人々であり、しかしながら圧倒的に多くのひとは、最終的には田舎のお墓に納まるか、さもなくば新たにその都市（あるいはその近郊）においてお墓を買うなどして新たな檀家となるという状況が見られる[19]。伝統的な檀家制度は崩壊しつつあっても、お墓があってそこに納まり、残された人は墓参するというありよう自体はいまだに日本人全体に共通しているといえよう。霊園事業の母体の多くは仏教系の宗教法人であり、そこにお墓を買い定期的に墓参する人々は信者の意識はもっておらずとも、宗教法人の側では彼らを自らの信者に数えよう（お墓そのものは公営の霊園等にあっても、本人、家族、遺族らがその附近の寺院等のあらたな檀信徒となる例も多い）[20]。

また、『宗教年鑑』の「仏教系」には、仏教系のいわゆる新宗教も含まれている。これらは、組織宗教およびその延長線上にあるものの信者として考えることができる。その信者のうち少なからぬ人々は、その新宗教の会員でありつつ、かつ菩提寺をももち、亡くなればその菩提寺にてお葬式をあげる。したがって、「仏教系」のなかで二重に数えられている可能性がある。

全体からすればごく一部ではあろうが、幾らかの寺院などでは主催の文化講座や坐禅会などの行事の参加者を信者数に加えているところもあるようである。すなわち会員宗教である。檀家としてあるいは組織宗教の信者としては数えられていない人が、これによって拾われている可能性（またあるいは二重に数えられている可能性）もあろう。

神道系、仏教系それぞれの教団ともに、個別の世帯それぞれの構成人数をおそらくは正確に把握していない（頒布されたお札に、檀家数に、それぞれ一定数を乗じて信者数を算出していることが考えられる）。かつ、神道系、仏教系それぞれのうちにおいて二重三重に数えられている可能性もあり、しかしながら、それがどの程度であるのかを正確につきとめること

は容易ではない。そうはいうものの、往々にして、初詣は一家揃っていくし、法事も、檀家としては、一家揃って参ずるというのが、まだまだ多くの日本人の行動ではなかろうか。とすれば、やはり教団としては、ひっくるめて「うちの信者」とみなすであろうことは想像に難くない。

神社の氏子あるいは寺院の檀家としての意識を普段はもっていなくとも、祭礼の寄附に応じて実際に参加し、檀那寺の修改築に協力する人々は少なくない。しかしながら、一人ひとりに向かって、「あなたは神社にお参りに行きましたね。ではあなたは神道の信者ですね。」「お寺さんに墓参りに行きましたね。あなたは何々宗の信者ですね」と聞いてみると、「えっ、いやそうじゃないですよ」と答える人が7割がたになる。だからあらためて「あなたは何か宗教を信じていますか」と聞くと、2割から3割ぐらいの人しか「はい」と答えない。あらためて個人に尋ねれば、実際、信条として不信心や無宗教、あるいは無神論者と称する人は多いのである。日本人の多くは、自らは信者であるという意識なく、神道系と仏教系とのいずれもの教団がそれぞれわが教団の信者であるとみなすような行為、行動を日常的にしているということである。

家（実家）に帰れば同じお茶の間の空間に仏壇もあれば神棚もある。お墓参りも行けば、初詣にも行く[21)]。多くの日本人は、初詣、お盆、お彼岸、七五三、結婚式、葬儀や法事、祭礼、厄除け、祈願など、季節や人生の節目に神社やお寺と関わりをもつ。本人が自覚しているか否かにかかわらず、かなり多くの日本人が氏子として檀家として神社や寺院の信者名簿に載っている。教団からすれば、氏子やっていて、檀家やっていて、何かあれば参拝に来る、お参りに来る、そういう人（およびその家族）は当然うちの信者さんということになる。習俗、風習、慣習といったものとして、もともとは宗教的な意味合いをもっていた行為が、その意味合いは剥落しつつ、なお残存している。したがってそこは文化宗教と制度宗教とが相俟つことになるわけだが、そういった人、個人の側では信者意識は非常に低くても、それらが宗教行為であるという意識は薄くとも、教団側からすれば当然うちの信者さんということになる。これが2億と2-3割を説

明する理由である。

4.「二重信仰」という表現について —むすびにかえて—

いまだ少なからぬ家に神棚と仏壇の両方があることをもって、ひとりの人が氏子をやり檀家となっていて、初詣にも行きお墓参りにも行くことなどをもって、そのような状況を「二重信仰」あるいは「多重信仰」「重層的信仰」というような言葉によって表現しているのを時々目にすることがある[22]。しかしながら、これには違和感を覚えざるをえない。結局は「信仰」という言葉の定義に関わる問題であるが、祀られている神が何かも知らず、そのお寺の宗旨も知らない状態を、「信仰している」「信仰している者である」といえるであろうか。神棚にお水をあげ仏壇に手を合わせる行為や何となく神仏の類を信じている状態、さらには困ったときの神頼みといったようなことをどう評価するかによっては、「二重」あるいは「多重信仰」という言葉も許容されるかもしれないが、少なくとも組織宗教の自覚的信者と同等な信者とはいいがたい。そのような表現によっては2-3割の説明ができないといわざるをえないのではないだろうか。本人（個人個人）はそれを「信仰」と考えていないからこその2-3割なのである。文化宗教というのは、少なくとも純粋なあるいは熱烈な信仰心をともなわない「行事」なのである。賽銭なりお布施なりを拠出する行為は、そのような信仰心をともなわない「慣習」にしたがっているだけである。にもかかわらず、教団側からすれば彼らは信徒に他ならない。「信仰をもたない『信者』が重層的に存在している」これがこの国の宗教のありようなのである（括弧つきの信者は、勿論、教団にとっての信者という意味である）。

同じ人が初詣に行き、節分をやり、お盆にはお墓参りをし、クリスマスになればパーティーを開く。さらには結婚式はキリスト教式で挙げるという人が少なからずいる。信者でもないのに初詣に行き、クリスチャンでもないのにクリスマスを祝うことを特に何とも思わない人が、いずれも8割を超えている[23]。これらは、まさしく、日本的な文化宗教といえよう。

註

1） 平成19（2007）年12月31日現在の数値として文化庁（編）『宗教年鑑 平成20年版』東京：文化庁、2009、pp. 30-31にあげられている。

2） 総務省統計局によれば、平成21（2009）年11月1日現在（確定値）で総人口が1億2,752万2,000人、日本人人口が1億2,581万5,000人である（http：//www.stat.go.jp/data/ jinsui/tsuki/index.htm（2010年4月27日閲覧））。

3） http：//www.ism.ac.jp/kokuminsei/table/data/html/ss3/3_1/3_1_all.htm（2009年8月7日閲覧）。第11次（2003）では30％、第10次（1998）では29%である。

4） 『読売新聞』2008年5月30日（朝）。『読売新聞』2005年9月2日（朝）では22.9％、2001年の調査では21.5%である（石井研士『データブック 現代日本人の宗教 増補改訂版』東京：新曜社、2007、p. 8）。その他の機関による調査の数値を含む、「信仰をもっている」「宗教を信じている」人の戦後の変化については、石井研士、前掲書、pp. 1-5を見よ。

5） David B. Barrett『世界キリスト教百科事典』東京：教文館、1986、pp. 78-79。ここにはアフリカのカトリック信者とアメリカのペンテコステ派信徒の例があげられているが、いずれも、日本とは逆で、個人に聞くやりかたのほうが多くなっている。

6） 用語の定義を含み、文化庁（編）『宗教年鑑 平成20年版』（前掲）、pp. 24-27を参照のこと。いかなる被包括宗教法人（団体）にも調査表は送附されないことに注意。

7） それぞれの詳細は、統計数理研究所のそれについてはhttp：//www.ism.ac.jp/kokuminsei/outline.htmlなど（2010年5月16日閲覧）を、『読売新聞』のそれについては『読売新聞』2008年5月30日（朝）を見よ。

8） 統計数理研究所の調査結果では「1. もっている、信じている」と「2. もっていない、信じていない、関心がない」の合計が常に100（％）となっているが、『読売新聞』の最新のそれでは、「信じている」が26.1 ％、「信じていない」が71.9 ％、さらに「答えない」が2.1%となっている。

日本人（日本在住者）を対象とした「個人に聞く」方法による調査は、註4）にも記したように、他にも幾つかあり、「あなたは何か宗教団体に入っていますか」と尋ね、選択肢として具体的な宗教の名前をあげておいた場合、その合計は単純に「信仰がある」と回答した割合よりも一般的に高くなることが知られている（石井研士、前掲書、p. 55）。西久美子「“宗教的なもの”にひかれる日本人 ―ISSP 国際比較調査（宗教）から―」『放送研究と調査』第59巻第5号（2009年5月／通巻696号）、東京：NHK 放送文化研究所／日本放送出版協会、2009、p. 66をも参照のこと。また、「信仰している宗教が」あるかと尋ね、選択肢として

「ある」「特に信仰していないが、家の宗教はある」「ない」を用意した調査では、「ある」の割合がおよそ1割前後、「家の宗教はある」の割合がおよそ2割前後となっている（石井研士、前掲書、pp. 30-32）。この調査の詳細については、木村雅文「現代日本人の宗教意識 —JGSS-2000からのデータを中心として—」大阪商業大学比較地域研究所／東京大学社会科学研究所（編）『日本版 General Social Surveys 研究論文集 JGSS-2000で見た日本人の意識と行動［東京大学社会科学研究所資料 第20集］』東京：東京大学社会科学研究所、2002、pp. 125-134（http：//jgss.daishodai.ac.jp/Japanese/5research/monographs/jgssm1pdf/jgssm1_9pdf（2008年10月17日閲覧））、同「現代日本人と“家の宗教”—JGSS-2000/2001からのデータを中心として—」大阪商業大学比較地域研究所／東京大学社会科学研究所（編）『日本版 General Social Surveys 研究論文集［2］JGSS で見た日本人の意識と行動［東京大学社会科学研究所資料 第22集］』東京：東京大学社会科学研究所、2003、pp. 145-162（http：//jgss.daishodai.ac.jp/Japanese/5research/monographs/jgssm2pdf/jgssm2_9.PDF（2008年10月17日閲覧））を見よ。

9）竹村牧男「［論説］現代社会と宗教の役割」『宗務時報 No. 108 平成15年8月』東京：文化庁文化部宗務課、2003、pp. 22-44のなかの pp. 28-31、33-34。井門富士夫による文化宗教／制度宗教／組織宗教／個人宗教の規定については、例えば井門富士夫『神殺しの時代』東京：日本経済新聞社、1974、pp. 154-166、同「第一章 現代社会と宗教」井門富二夫（編）『講座宗教学第3巻 秩序への挑戦』東京：東京大学出版会、1978、pp. 31-106のなかの pp. 57-69などを見よ。

10）註8）ならびに石井研士、前掲書、pp. 33-34を見よ。

11）文化庁（編）『宗教年鑑 平成20年版』（前掲）、2009、pp. 30-31。この分類はあくまで便宜的なものであり、またその宗教法人がどれに属するかは、原則として、これもその宗教法人の自己申告によっている。なお、諸教とは前3系統のいずれにも入らないものであって、諸教 = 新宗教ではない。同、p. 28および石井研士、前掲書、pp. 42-43をも参照のこと。

なお、これらの数値はここ数年大きくは変動していない。平成16（2004）年12月31日現在では、神道系1億858万457人、仏教系9,348万5,017人、キリスト教系216万1,707人、諸教959万9,480人、計2億1,382万6,661人（文化庁（編）『宗教年鑑 平成17年版』東京：文化庁、2006、pp. 30-31）、平成17（2005）年12月31日現在では、神道系1億724万7,522人、仏教系9,126万273人、キリスト教系259万5,397人、諸教991万7,555人、計2億1,102万747人（文化庁（編）『宗教年鑑 平成18年版』東京：文化庁、2007、pp. 30-31）、平成18（2006）年12月31日現在では、神道系1億681万7,669人、仏教系8,917万7,769人、キリスト教系303万2,239人、諸教981万7,752人、計2億884万5,429人（文化庁（編）『宗教年鑑 平成19年版』東京：文化庁、2008、pp. 30-31）となっている。

12) キリスト教系の信者数が比較的正確であるとされていることについては、石井研士、前掲書、pp. 59-60 を参照。諸教およびその他の系のなかのいわゆる新宗教（比較的新しい宗教）の信者数に関して、少なからぬ教団において実際には割り引いて考えなければならない可能性については、同、pp. 48-52 を見よ。なお、井門富二夫『世俗社会の宗教』東京：日本基督教団出版局、1972、pp. 23-24 をも参照のこと。

13) 文化庁（編）『宗教年鑑 平成 20 年版』（前掲）、pp. 50-51。

14) 石井研士、前掲書、p. 47 を見よ。藤井正雄『現代人の信仰構造 ―宗教浮動人口の行動と思想―』（日本人の行動と思想 32）、東京：評論社、1974、p. 22、井門富士夫『神殺しの時代』（前掲）、p. 44 および石井研士『戦後の社会変動と神社神道』東京：大明堂、1998、pp. 106、157、230 をも参照。

15) 例えば筆者の父親（70 代、静岡県伊豆の国市在住）は、近所の神社の氏子であり（毎年一定額のお金を納めてお札を貰って（購入して）いる）、三島市にある三島大社にも毎年お米を納めてお札を貰っており、地域の自治会を通じて伊勢神宮のお札も貰って（購入して）いて（神棚にはみっつのお札がある）、さらに戦没者の遺族として靖国神社（単立宗教法人）の遺族会に毎年一定額のお金を納めており、神道系のなかで三重（四重）に数えられている可能性があり、それによって結果的に、配偶者である妻（筆者の母）ばかりか、現在は千葉県習志野市在住の筆者や場合によってはその妻子まで神道系の信者に数えられることになっている可能性があるという考えかたもできよう。

16) http：//d.hatena.ne.jp/nisinojinnjya/20091202（2010 年 4 月 19 日閲覧）。

17) 多くの場合、末寺（被包括宗教法人）は、本山（包括宗教法人）にたいして、自寺の檀家数を報告しており、包括宗教法人は、この檀家数に一定数を乗じて、文化庁に報告しているものと思われる。藤井正雄、前掲書、p. 22 を見よ。

18) 例えば、岩井紀子「〈墓〉意識の多様化の背景 ―JGSS-2000／2001 のデータ分析を通して―」大阪商業大学比較地域研究所／東京大学社会科学研究所（編）『日本版 General Social Surveys 研究論文集［2］JGSS で見た日本人の意識と行動［東京大学社会科学研究所資料 第 22 集］』東京：東京大学社会科学研究所、2003、pp. 163-178（http：//jgss.daishodai.ac.jp/Japanese/5research/monographs/jgssm2pdf/jgssm2_10.pdf（2008 年 10 月 17 日閲覧））、田島靖久／田中博／津本朋子／野口達也／加福文「特集：最新調査 寺・墓・葬儀にかかるカネ」『週刊 ダイヤモンド 特大号』2009 年 1 月 24 日、第 97 巻第 4 号（通巻第 4262 号）、東京：ダイヤモンド社、2009、pp. 30-73、「日本人の葬送観に変化 自由葬、無宗教葬が増加 希薄になる家族の結びつき」『新宗教新聞』2010 年 4 月 25 日を見よ。

仏教系の信者数が実際には日本の人口ばかりか 1 億をもそれなりに大きく下回っている背景には、このような事情もあろう。なお、比較的大きいと思われる

伝統的な仏教宗派のひとつである曹洞宗をはじめ幾つかの宗派の信者数が「未報告（不詳）」となっており（つまり信者数＝０）、そのことも小さからぬ一因であろう（文化庁（編）『宗教年鑑 平成20年版』（前掲）、pp. 70-71など）。さらにいえば、伝統仏教宗派の末寺のうちの幾らかは、本山に納める賦課金の額を抑えるため、本山にたいして実際の檀家数より少なく報告しているという実態もあるようである（井門富二夫『世俗社会の宗教』（前掲）、p. 21）。

19) 藤井正雄、前掲書、pp. 74-89、94、128、232を参照。

20) 藤井正雄、前掲書、pp. 113-144を参照。

21) 西久美子、前掲論文、p. 70：「多くの人が『よくする』宗教的な行動は、『墓参り』と『初もうで』で、『墓参り』は66 %、『初もうで』は55%を占めた。これに『したことがある』人を加えると『墓参り』は95 %、『初もうで』は92%となる。」河野啓／高橋幸市「日本人の意識変化の35年の軌跡（1）―第8回「日本人の意識2008」調査から―」『放送研究と調査』第59巻第4号（2009年4月／通巻695号）、東京：NHK放送文化研究所／日本放送出版協会、2009、p. 30をも参照。

22) 例えば佐々木馨『生と死の日本思想 ―現代の死生観と中世仏教の思想―』東京：トランスビュー、2002、pp. 16-17、29、36-37。ただし同書、pp. 27、29、36-37、57などでは「（神無きままの）無信仰の信仰」という表現が用いられてもいる。木村雅文「現代日本人と“家の宗教”―JGSS-2000/2001からのデータを中心として―」（前掲）には“信仰のない宗教”という表現が見られる。

23) 『読売新聞』2008年5月30日（朝）。